
誘導弾主兵主義

通信参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘導弾主兵主義

【Nコード】

N8259M

【作者名】

通信参謀

【あらすじ】

ライト兄弟が有人飛行実験に失敗してから六年後の一九〇九年、日本において二宮忠八が開発した「玉虫型飛行器」が、有人動力飛行に世界で初めて成功した。

しかし人種差別が平然とまかり通っていた当時、歴史を変える発明は「有色人種が開発した」という理由で、顧みられることはなかった。

飛行機が注目されるようになるのは第二次世界大戦後、二〇世紀も中葉に差しかった頃のことだった。

人類が飛行機の有効性に気が付かなかった世界。

各国海軍は二一世紀初頭においても、大艦巨砲主義であり続けた。だが日本に、「誘導弾を主兵装とすべき」と主張する一人の提督がいた。

この男の主張が、やがて世界の流れを変えることとなる……。

序章 『ながと』

一九四五年九月二日。

東京湾に浮かぶ戦艦『ミズーリ』にて、大日本帝国陸海軍は、無条件降伏した。大東亜戦争 アメリカで言うところの太平洋戦争は、一応の終結を迎えた。

艦隊決戦で一度は米太平洋艦隊、英東洋艦隊を撃滅せしめ、世界に武威を轟かせた連合艦隊も、今は見る影もなく凋落していた。世界最大と謳われた戦艦『大和』『武蔵』はマリアナ沖に沈み、姉妹艦の『信濃』と、竣工間もなかった『尾張』はフィリピン、エングノ岬沖に沈んだ。帝国海軍が建造した最後の戦艦『尾張』は、連合艦隊の終わりを告げたのだ。

唯一残った戦艦『陸奥』は、浮き砲台にその身をやつした。

日本はその後、一九五一年九月四日に大東亜戦争が正式に終結するまで、六年にわたり連合軍に占領された。

あの戦いから七〇年が経過した。この日、日本国海上自衛隊はついに念願だった戦艦を竣工させた。もともと、海上自衛隊の分類では、戦艦ではなく大型護衛艦だが。

これまでに就役させていた二隻の大型護衛艦『ひゅうが』『いせ』は、ジェーン海軍年鑑において巡洋戦艦に分類された、中途半端な艦だったが、この新型の大型護衛艦22DDH『ながと』はまず間違いない戦艦である。

基準排水量四万五〇〇〇トン、五〇口径四三三ミリ砲八門は、太平洋戦争末期に壮絶な最後を遂げた『長門』を凌駕している。

さすがにパゴダマストではないが、その外観にはどこことなく、『長門』を思わせる物がある。

だが、それを冷やかな目で見つめる男がいた。海上自衛隊第一護衛隊群を束ねる、戸田 浩三海将補である。

誘導噴進弾 すなわちミサイルの優位性を訴える戸田は、大型護衛艦など建造するぐらいなら、兵器庫艦を建造すべきだと主張していた。なんの因果か、その戸田の下に大型護衛艦が配備されたのだから、世の中不思議なものである。

第一護衛隊群の新たな旗艦となった『ながと』の艦橋は、さすがに広い。これまでの他国の巡洋艦程度の規模しかなかった護衛艦と比べれば、雲泥の差である。

大型なだけあり、居住性も抜群だろう。基本的に近海型海軍である海上自衛隊の艦艇は、その居住性の悪さに定評（？）があつたが、『ながと』は別のような。戦艦……ではなく大型護衛艦は兵装の都合上、どうしても大型にならざるを得ない。その一方、必要人員はハイテク化に伴いはるかに削減されているから、居住区は広い。『ながと』では初めて、一尉以上の中級幹部にも、艦長の特権だった個室があてがわれているのだ。

大型護衛艦 DDH (Defense destroyer heavy) を直訳すれば、重防衛駆逐艦となるだろうか。四万五〇〇〇トンを超える駆逐艦など、帝国海軍の先人たちが聞いたらどう思うだろうか。「海自はそのうち、六万四〇〇〇トンの駆逐艦を造るぞ」。冗談がにわかに現実味を帯びてきた。このままエスカレートすれば、本当に造りかねない。

「まさか、な」

そんな話を聞いていた『ながと』艦長有阪 洋史一等海佐は、思った。今の政府は、そこまで軍拡を望んではない。『ながと』だって、中韓に対抗するための物であり、韓国の巡洋戦艦なら『ひゅうが』型で対抗できるし、中国の戦艦も今のところ『施琅』一隻だ。仮に新たに大型護衛艦を建造しても、それは『ひゅうが』型だろう。それどころか向こう一〇年は、新規の建造はないかもしれない。

それより、有阪にとっての目下の問題は、上官の戸田である。大

型護衛艦の魂とも言うべき主砲を鼻で笑い、乗員の士気を著しく低下させる御仁だ。

そんなにミサイルが好きなら、ミサイル駆逐艦にでも旗艦を移せばいいのだ。はっきり言って迷惑だ。

もちろん、面と向かつては言えない。

周囲の誰もがそう思っているのは、紛れもない事実だ。砲術科では特に陰口が多いらしい。

果たしてそのことを知らないのか、それとも神経が図太いのか、戸田は今日もミサイルの優位艦砲の劣位を風潮していた。

「砲弾なんて物は値段が高いし、せいぜい四万メートルしか届かん。その点ミサイルはいい。一〇〇キロ先からアウトレンジできる。その上百発百中だ、どちらが有利かなど、猿でも分かる」

艦橋から二基の主砲塔を見下し、断言していた。

そして困ったことに、それはあながち間違いではない。例えばかつての戦艦『大和』の四六センチ砲は、最大射程四万一千八百メートル。米海軍の『ニミッツ』級原子力戦艦の四八三ミリ砲も、詳細は機密だが、四万六千メートル程だ。

一方海上自衛隊が使用する対艦ミサイルのRGB-84ハーブーンは、射程一三〇キロ。つまり艦砲の三倍だ。これなら、確かに一方的に攻撃できる。百発百中はないが、命中率も艦砲の比ではない。さらに海上自衛隊には、最新の12式艦対艦誘導弾がある。『ながと』にも搭載されているが、射程は二二〇キロ、海面二メートルを飛び、弾着寸前にさらに降下、喫水線下にまでダメージを与えられる。戦艦の主要防御区画は無理でも、装甲が薄い部分なら撃ち抜ける。滑空魚雷ともスカイフィッシュとも呼ばれる兵器である。余談だが、この12式艦対艦誘導弾は実は、主砲とともに『ながと』の根幹をなす兵器だ。つまり『ながと』はVLSを有し、対艦誘導弾を搭載しているから、戦艦ではなく駆逐艦なのだという主張なのだ。同じ手段は『ひゅうが』型でも行われている。

だが、確かに現時点では誘導弾の命中率は圧倒的だが、『ながと』

を始めDDH21計画艦には、将来主砲をAGSに換装する計画もあるのだ。予算さえ確保できれば、やがて解消されるだろう。予算さえ確保できれば……。

それに確かに砲弾は高価だが、誘導弾はもつと高い。砲弾が割高なのは、命中率が低く一海戦で使用される量が多いからで、AGSが導入されれば解決できる。

有阪としては、早いところAGSを採用し、VLSを撤去して欲しかった。遠距離砲戦が基本の戦艦同士の撃ち合いでは、VLSは危険極まりない存在なのだ。大落角の敵砲弾が命中すれば、誘爆し、瞬く間に戦闘力を奪われてしまう。

国民や「周辺国」への配慮など、政治的な理由で自分たちが危険に晒されるのは、納得できない。自衛隊は政治から切り離され発言権がないのに、政治は勝手な理由で自衛官を危険に晒すのだから、不公平だ。

序章 『ながと』（後書き）

どうも、通信参謀です。

新作連載開始です。

今回は、あらずじにもある通り、飛行機が未発達なため、二一世紀にまだ大艦巨砲主義が主流の世界が舞台です。

しかもこの世界、飛行機が未発達な割にヘリコプターやミサイルは発達しているという、テクノロジーがだいぶ歪んだ世界ですが、それにも理由があります。

さて、空母などを無理やり戦艦や巡洋戦艦に変えとみました。

Defense destroyer heavyはかなり無理があつたかな？

まあ、それを言ったら世界観そのものに無理がありますが。

何はともあれ、よろしく願います。

ご意見、ご感想お待ちしております。

お気軽にどうぞ。

第一章 尖閣諸島海戦1

最近、東シナ海がきな臭い。これというのも、中国の人民解放海軍が、旧ソ連の『ワリヤーグ』こと『施琅』を就役させてからだ。以来、予てから日中台で領有権を巡って争っていた尖閣諸島周辺で、堂々と示威行為を繰り返している。

アメリカ軍は、中国の台湾に対する圧力の増加を警戒しており、尖閣諸島の問題は自衛隊に任せるほかない。しかし自衛隊はこれに対処できなかった。

原因はいくつかある。

まずは、自衛隊が安易な戦力投入に反対したこと。もちろん命令とあれば戦うが、その前の段階として外交努力を行うべきである。そして仮に武力紛争となっても、早期に解決できるように外交努力を継続すること。それを外務省ではなく、首相に要求した。自衛隊は と言うよりほとんどの国民はそうかもしれないが 外務省を信用していないのだ。

そして、野党の反発である。内閣支持率は右肩下がりなのだ。別に大きな失策をしたわけではないが、不思議と内閣支持率は、急降下ではないにしても徐々に下がっている。発足当初七割台だった支持率は、半年で五割を切っている。この状況下で野党の批判的になるような問題は、起こしたくない。

そして、なんと言っても憲法九条が最大のネックだ。憲法が戦争や武力紛争の存在を否定している以上、自衛隊は使えないし、そもそも交戦規定に相当する法が存在しない。

だが、益平 達首相はついに決断を下した。二〇一六年四月八日、ついに第一護衛隊群に出動命令が下された。これはぎりぎりのラインだった。これ以上人民解放海軍の跳梁を許せば、尖閣諸島の領有を既成事実化されてしまう。そうなれば、北方領土や竹島がそうで

あるように、奪回は難しいだろう。益平は鷹派というわけではないが、譲れない一線という物を持っている。人民解放海軍は、その一線に触れたのだ。

表向き、訓練と称している。もし訓練中に領海侵犯した人民解放海軍の艦隊の攻撃を受ければ、緊急避難法に基づき反撃し、排除できる。攻撃を受けなくとも、護衛隊群が居座り続けられれば、領有の既成事実化を防ぐことができる。

『ながと』以下第一護衛隊群は単縦陣を組み、軍艦行進曲が流れる中、横須賀を後にした。

先頭の五〇〇トン級汎用護衛艦一番艦『ながら』の後ろにDD五隻が続き、その後方にDDG二隻、殿軍が『ながと』となっている。“海軍”風に表現するなら、戦艦一隻、ミサイル駆逐艦二隻、汎用駆逐艦六隻。

「『長門』の二の舞にならなければいいがな」

戸田が、相変わらず士気を低下させることを言う。有阪も嫌気が差してくる。

「『長門』の二の舞」というのは、菊水作戦のことを言っているのだろう。この作戦に呼応して、太平洋戦争末期に『長門』は軽巡一隻、駆逐艦八隻を伴い、沖縄へ水上特攻を行った。待ち受けるアメリカ軍の戦艦は新旧併せて三〇隻。『長門』以下一〇隻は数百隻の大艦隊と最後の死闘を演じた。“ビッグ・セブン”の一角と謳われた巨艦も、数には勝てず、生きて帰ることができた艦はわずかに『雪風』『冬風』『涼風』『初霜』の、駆逐艦四隻だけだった。もし『長門』を沈めた時点で、アメリカ軍が戦闘を休止しなければ、四隻も助からなかっただろう。

『ながと』がこれから沖縄に向かうというのに、全く不吉なことを言う。

第一護衛隊群が尖閣諸島に到達したのは、四月九日の正午前だっ

た。人民解放海軍の姿はない。ひとまず、衝突は避けられそうだった。

有阪以下全員が安堵したが、一人、それを残念がる男がいた。例によって戸田である。

戸田は人民解放海軍がない事実を知り、露骨に舌打ちした。

「チツ、なぜ中共のポンコツ艦がない。これでは滑空魚雷の射撃演習ができないじゃないか」

どうやらこの御仁、人間性にかなり問題があるらしい。有阪はやはり気分を悪くした。なぜこのような男が、海将補に納まっているのか、理解できない。言いぐさからして射撃演習と称して、人民解放海軍の艦艇を沈めるつもりだ。単なる危険人物ではないか。

「どちらにしろ演習は行われます。邪魔がない分、気兼ねせず撃てますが」

「標的がないのではつまらないだろう。そうだ、北に中共が勝手に造ったガス田があったな、そいつを叩こう」

「拒否します」

有阪は堂々と言った。暴走しがちな上官を止めるのも部下の仕事だ。

恐らく、乗員も幕僚も、第一護衛隊群全員が拒否するだろう。

戸田も諦めるしかなかった。

事態はいつだって急変する。一〇日早朝、人民解放海軍が姿を見せたのだ。しかもその中には『施琅』の姿もあった。

「キタキタキタキタアー！ ポンコツ艦どもめ、ようやくきたな！ 艦長、撃て！ 撃って撃って撃ちまくれえ！ 奴らを海の藻屑にしろ！ 一隻残らずだ！！ 全て沈めろ！！！」

尋常ではない戸田のテンションに圧されながらも、有阪は諫めた。

「落ち着いてください。我々は先制攻撃はできません」

「我々は実弾演習中なのだ。一発ぐらい流れ弾が当たっても、領海を侵犯した上、不用意に訓練中の我々に近づいた奴らが悪い。違う

か？」

幕僚長の小此木 稻哉一等海佐が、提案した。

「まずは警告しましょう。実弾演習中であることを事前に通告すれば、事故であることを主張できます」

作戦幕僚、鈴木 孝喜二等海佐が続く。

「それなら併せてここが日本の領海であることも。事故になっても領海侵犯をした人民解放海軍が悪いと、主張できます」

戸田は一瞬考えたが、すぐに頷く。

「分かった。警告しろ」

直ちに発光信号が送られ、併せて全てのチャンネルをオープンにして、平文で通信を発信した。近くを通る船がいれば、傍受して事前警告の証拠になる。

やがて人民解放海軍の艦隊から、返事がきた。尋常ではない、物騒な返事が。

威嚇射撃。それが答えだった。中国も、一步も退くつもりはないらしい。

彼方で発砲炎がきらめいた。

およそ一分後、四本の水柱が、第一護衛隊群の周囲に屹立した。

その大きさは普通ではない。『ながと』の艦橋を超え、マストよりも高くそそり立った水柱は、巨砲の弾着を示す。

「なんだこれは！？ 奴らの、『施琅』の主砲は四〇〇ミリではないのか！？」

その水柱の大きさは、『施琅』の主砲が、少なくとも『ながと』と同等か、それ以上であることを意味していた。

第一章 尖閣諸島海戦1（後書き）

今回の小説では、いきなりバトリます。

初っ端から日中戦艦のバトルです。

戸田海将補は問題あります。

それではご意見ご感想お待ちしております。

第一章 尖閣諸島海戦2（前書き）

今回少々話が逸れ、『ながと』建造の経緯と『施琅』について述べます。

それから威嚇射撃をするまでの『施琅』側のやり取りです。

現在、ファーストガンダムの再放送を見ながら書き進めてます。

第一章 尖閣諸島海戦2

海上自衛隊の大型護衛艦保有には、複雑な経緯があった。

中国の人民解放海軍はソヴィエト海軍の戦艦『ワリヤーグ』を『施琅』として就役させようとしている。また、それに合わせ二〇二〇年までに原子力戦艦、通常型戦艦を合わせて三隻保有すると息巻いている。

また、中国の影に隠れて軍拡を進める韓国も気になった。彼の国はすでに三隻のコリア・バトルワゴンこと『世宗大王』級巡洋戦艦を完成させており、その主砲は三〇五ミリにもなる。

対して海上自衛隊の『あたご』型は二〇三ミリ、『しらね』型DDHでも二五四ミリ。これでは砲戦となったら分が悪い。

『施琅』『世宗大王』に対抗すべく計画されたのが、DDH21計画である。DDHはDefense destroyer heavyを示し、21は二一世紀を示す。日本風に言うなら、二一世紀重防衛駆逐艦計画となるだろうか。老朽化、陳腐化が進む現有のDDHに代わり、規模も性能も格段に向上したDDHを六隻、建造する計画である。

だがDDH21計画は困難を極めた。

まずは予算。この数年、防衛費は右肩下がりである。とてもDDH六隻を建造、維持するだけの費用も、それを扱う人員の人件費も捻出できそうになかった。

また、国内でも戦艦は侵略兵器とする風潮が蔓延っていた。

DDH21計画は、大幅に縮小せざるを得ない状況に追いやられた。

だが17DDH級、後の『ひゅうが』型DDHは、申し分のない打撃力を誇る。主砲こそ三〇五ミリと『世宗大王』と同等だが、門数は一二門と『世宗大王』より四門も多く、同型艦『いせ』と合わせて二四門で、韓国が持つ『世宗大王』級三隻と、同等の投射力を

持つ。

だが、自衛隊は満足しなかった。『ひゅうが』型は所詮、巡洋戦艦。米えある帝国海軍の末裔が、満足するはずがない。

実際問題として、コリア・バトルワゴンには『ひゅうが』型でいいとして、中国の『施琅』に対抗するには力不足である。

当初DDH21計画では、『ひゅうが』型DDH六隻を建造する予定だったが、数が半分に減ったので22DDHは大幅に仕様変更され、単独で『施琅』と殴り合える打撃力が求められた。

問題は主砲だった。当初、三八ミリ、あるいは四〇六ミリとする案もあった。

ロシア海軍の『アドミラル・クズネツォフ』は四〇〇ミリだ。もともと同型艦の『施琅』もそうだろう。

22DDHの主砲は四三三ミリとなった。一挙に四三三ミリ砲搭載艦を建造するのは暴挙とも思えたが、しかし日本にはかつて四一センチ砲、四六センチ砲を搭載した戦艦を建造した経験があった。そして、『ニミッツ』級原子力戦艦を建造したアメリカも、技術を提供してくれた。決して無茶な試みではなかったのだ。

だが、人民解放軍は、日本で進行しているDDH21計画の大部分を掴んでいた。日本の防諜システムはお粗末な物で、観光客に見立てた諜報員とハニートラップを駆使し、信頼できる情報を確保していた。22DDHの主砲口径さえも。

22DDHの主砲は五〇口径四三三ミリ砲。『施琅』が搭載する予定の四〇〇ミリ砲では、撃ち負けてしまうことは、容易に想像できる。そこで、かつての米海軍戦艦『コロラド』級と同様の措置が採られた。すなわち、主砲をより強力な物に交換するのだ。

『施琅』が装備したのは、五〇口径四六〇ミリ砲。本来の主砲より、二回りも大きな砲を搭載した。無理やり巨砲を搭載したので不具合も噴出していたが、それも覚悟の上である。

結果として『施琅』は、速力は二七・八ノットまで低下してしま

つたが、満足のいく打撃力を備えた戦艦に仕上がった。これだけの巨砲を据え付けた理由には、22DDHのみならず、四八三ミリ砲を搭載する、米海軍の『ニミッツ』級原子力戦艦への対抗意識も、あったのだろう。

『施琅』艦長、王 蒙蹈大校は、いつも通り尖閣諸島での示威行為を行うべく『ソプレメンヌイ』級二隻、『旅州』級ミサイル駆逐艦二隻、『江衛?』級フリゲート二隻の計六隻を伴い、大連港を出港した。

だが、尖閣諸島に到着すると、すでにそこには海上自衛隊の『ながと』以下の艦隊が居座っていた。王がどうするか迷っていると、海上自衛隊の方から発光信号と無線で、警告がなされた。

『施琅』以下の領海侵犯を指摘した上で、海上自衛隊は実弾演習中であり、流れ弾が命中しても責任は日本の領海を犯した中国側にあるという、物騒な内容だ。そこからは、直ちに立ち退かなければ問答無用で“誤射”するという意志が読み取れた。

王は横にいる趙 壮建中將を見た。

趙は向き直り、命令を下した。

「艦長、砲撃用意だ」

「よろしいのですか？ 勝手に戦端を開いて」

「威嚇射撃だけだ。脅されてすこす引き下がっては、ここが日本の領海だと認めることになってしまふ。それは阻止する必要があるだろう」

「わかりました」

王は敬礼すると、指示を出した。

「主砲装填！ 弾種、徹甲！ 目標日本海軍戦艦、ただし命中させるな。近弾とせよ！」

命令が伝達され、揚弾機を使い弾火薬庫から砲弾が揚がってくる。そして自動装填装置により、砲尾から挿入された。

主砲塔内に待機する要員から、伝達される。

「装填完了しました。主砲射撃可能！」

「命中させるなよ、レーダーとの連動を切れ！ 手動でやれ！」

「了解。射撃管制を手動で行います」

レーダーと連動させると、問答無用で命中させてしまふ。

「撃て！」

王の命令で、『施琅』は火を噴いた。

第一章 尖閣諸島海戦2（後書き）

本来四〇〇ミリ砲搭載艦の『施琅』に四六〇ミリ砲は、かなり無理やりですね。

なんか、この小説無茶な設定ばかりの気が……。

それでも『アドミラル・クズネツォフ』級はサイズに割と余裕があるので、なんとか……。

不具合については、作中で追っていくつか触れます。

それでは、ご意見感想お待ちしております。

第一章 尖閣諸島海戦3

水柱が崩落する。艦橋に、砲塔に、甲板に、海水がかぶさった。戸田が叫ぶ。

「艦長、撃ち返せ！ このまま引き下がっては馬鹿にされるぞ！」
有阪としても、下がりたくはない。『施琅』の攻撃は威嚇射撃だろうが、それで引き下がっては、尖閣諸島を中国領と認めることになるってしまう。

威嚇射撃とはいえ攻撃を受けたのだから、これは正当防衛だ。有阪は腹を括った。

「主砲、徹甲弾を装填しろ！ それとVLSも発射準備だ。まずは12式で攻撃する！」

『ながと』には、四モジュールのVLSが設置されている。三二発の誘導弾のうち、12式艦対艦誘導弾は半数の一六発。

打撃力は分らないが、VLSに誘導弾を残したままだと、砲戦の際に危険なだけだ。ならばいつそ、間合いを詰められる前に使ってしまった方がいい。

「目標は護衛の駆逐艦及びフリゲート、発射準備急げ」

この有阪の考えは当然のことだった。誘導弾では戦艦を撃沈できないのは、常識なのだ。

だが、戸田は不服だった。

「何を言う艦長！ 12式は戦艦を狙うべきだ！」

だが、個艦の指揮権は艦長にある。当然、使用する兵装は、通常は艦長が決める。

有阪はもともと灰汁が強い。相手が防衛大臣だろうと内閣総理大臣だろうと、間違った命令に従う気はない。

「撃て！」

有阪の命令で、一六発の12式艦対艦誘導弾がVLSから飛び出した。標的は『ソブレンヌイ』級『旅州』『江衛？』級各二隻の

計六隻。一隻につき二、三発だ。

『ながと』から誘導弾の発射を示す白煙が上がったのは、『施琅』からも見て取れた。それはすぐに上昇をやめ海面に向かう。

「敵艦、誘導弾を発射……、ああ？ お、落ちたあ！？」

いや、落ちていなかった。

CICに移った王は、艦橋にいた兵員からの間が抜けた報告に、モニターを見た。艦外カメラの映像は、脅威が艦隊に迫っている事実を的確に捉えている。

誘導弾は戦艦にとっては大した敵ではないが、駆逐艦やフリゲートには脅威だ。

「迎撃しろ」

「蠅叩きだ！ 日頃の訓練の成果を見せてみる！」

副長の明 正興中校が、指示を出した。“蠅叩き”というのは、明が名付けた対12式艦対艦誘導弾戦法の名前である。向かってくる誘導弾が、自衛隊でスカイフィッシュと呼ばれるからだ。秘境に巣くう正体不明の生物スカイフィッシュは、実は蠅ではないかと言われている。蠅を落とすのは蠅叩きだということだ。

明は教養があり、話していて退屈しない。しかも真面目で優勝なので、王も重宝している。

各艦の機関砲が迎撃すると同時に、主砲が旋回し、誘導弾の針路上に次々水柱を立てていく。艦隊では以前から日本との武力衝突を想定し、この戦法を訓練していた。

五発の誘導弾が水柱に突っ込み、誤爆した。だが一一発が生き残った。

誘導弾は全て護衛に向かっている。王には賢明な判断に思えた。戦艦を攻撃しても大した戦果は得られまい。脆弱な小艦艇に的を絞り、『施琅』を丸裸にしようというのだろう。

迎撃は失敗だった。最終的に阻止できた誘導弾は六発だった。『

ソブレメンヌイ』級は両艦が大破。『旅州』級は『瀋陽』を撃沈され、『石家荘』が中破。『江衛？』級は『榆林』が無傷だったものの、『榆溪』が撃沈された。

被害報告を受け趙は撤退も考えたが、しかし『施琅』は無傷だ。

『ながと』さえ撃沈すれば、あとの八隻は駆逐艦か、せいぜい軽巡程度だ。恐れることはない。

「艦長、反撃だ」

「分かりました。標的は自称駆逐艦ですね」

「ああ、小日本の戦艦もどきに、本物の戦艦という物を教えてやれ」
先ほどすでに装填を終えていた四門が、今度はリーダー誘導で即座に火を噴いた。

「次発装填急げ！」

王は焦っていた。四六センチ砲を搭載した『施琅』だが、弱点があるのだ。それが露呈する前に、『ながと』を葬り去りたかった。

やがて、弾着した。

「敵戦艦中央に命中弾二！」
半数の命中だ。

王はなおも命令を出し続ける。

「よし、照準そのまま、撃ち続ける！」

「敵艦八、『榆林』に向かいます！」

『榆林』は唯一生き残ったフリゲートだ。『榆林』を撃沈されれば、『施琅』は真正正銘の丸裸になる。なんとか守りたい。

「副砲、『榆林』を援護しろ！」

「敵弾きます！」

「総員衝撃に備え！」

王は指示を出し、自らも身構えた。やがて、床が揺れた。

第一章 尖閣諸島海戦3（後書き）

現在、非常に機嫌が悪いです。

この場で言うのは場違いなのでしょうが……

なんなんだアイツは！

歴史をもう一度勉強し直した方がよろしい！

だいたい、日韓併合で大損害を受けたのは、むしろ日本ではないか！！

あそこまで無知で一国の首相として、恥ずかしくないのか！？

といった具合です。

こんなわけで、ニュースを見た時に近くにあつた居合刀で、思わずテレビを叩き壊そうとして家族に抑えられるほど、機嫌が悪いです。「アイツは頭の中が空っぽだ。あれでは中身が無い“空きカン”だ」とは我が家でよく言われることですが、為政者として、もっとしっかりして欲しいです。

と、長くなりましたが、ここから「誘導弾主兵主義」のあとがきです。

いよいよ本格的な砲戦が始まりました。

有阪の誘導弾は小型艦を狙うという判断は、真つ当なものです。

戸田など誘導弾主兵主義者は、まだまだ少数派。

台頭してくるのは、この海戦の後です。

というより実は、この海戦が契機になるのですが……、ネタバレが怖いので、これ以上は言う勇気がありません。

それでは、ご意見ご感想お待ちしております。

第一章 尖閣諸島海戦4

『施琅』は再度、四発の主砲弾を放った。

「敵艦発砲！」

『ながと』は対四三二ミリ砲の防御を施されている。だが『施琅』は少なくとも一七インチ以上、つまり同等以上の砲を装備している。距離三万六〇〇メートルとはいえ、命中弾を受ければただでは済むまい。

「あれは、四六センチ以上だな。まずいぞ」

戸田の冷静な言葉を、有阪はあえて無視した。艦長が自艦に自信を持たなくては、乗員に不安が広がってしまう。だが、だからといって何もしないわけにはいかない。指示を出した。

「衝撃に備えろ！ ダメコンはすぐに動けるように！」

「主砲装填完了！」

有阪の指示とほぼ同時に、各主砲塔から、報告が上がった。

直後、轟音が轟く。艦が揺れた。『ながと』は直撃弾を受けたのだ。戸田の言う通り、『施琅』の主砲は四六センチ砲以上らしい。半端ではない衝撃だった。これでは長くは保ちそうにない。

「撃てえ！ 撃ち返せ！！」

有阪は自らを鼓舞するように叫んだ。

号令一下、八発の四三二ミリ砲弾が飛び出す。

「次発装填！」

その横で、戸田が艦隊に命令を下す。

「『ながら』以下は『江衛？』級を攻撃しろ。ただし誘導弾は使うな、砲撃で沈めろ。誘導弾は標的撃沈後『施琅』を攻撃」

嬉しい話だ。『江衛？』級相手なら、片はすぐに着くだろう。長くとも一〇分も持ちこたえれば、援護を得られよう。『施琅』を沈めることはできずとも、戦いを有利にできる。

CICに被害報告が上がってきた。

被弾は二発。ともに艦中央部。副砲塔三基が破壊された。居住区に被害大。だが火災はなし。

有阪は、火災なしと機関全力発揮可能の報に、安堵した。

「弾着、今！」

『施琅』にも命中弾が生じた。五発が中央部から後部に向け命中したらしい。どの程度の損害を与えたかは不明だが、一方的にやられたわけではないことに、乗員は精神的に余裕を持ち始めた。

「敵艦発砲！」

『施琅』の放った砲弾はまたしても四発。妙だった。大昔ならまづは弾着観測をするため、交互撃ち方で主砲の半数を代わる代わる撃つ。しかし、レーダーで正確に管制される現代では、初弾命中は当たり前だ。弾着観測の必要はない。損害を減らすためにも、最初から一斉撃ち方で一気に決着を着けるのが、普通なのだ。

「なぜ、一斉撃ち方をしない？」

有阪は疑問に思ったが、しかし、ありがたいことに変わりはない。さらなる連打を加えるべく、号令を出す。

「次発装填完了次第撃ち返せ！」

有阪の疑問に対する答えを、王は知っていた。艦長なのだから、当然だ。

その答えとは、もともと四〇〇ミリ砲搭載艦の『施琅』に四六〇ミリ砲を搭載した結果生じた、不具合のひとつだ。

四六〇ミリ砲発射の衝撃は凄まじく、『施琅』の艦体強度では、斉射に耐えられないことが判明したのだ。自己崩壊を防ぐためには交互撃ち方をするしかない。

瞬間の打撃力ではなく、発射速度で圧倒する。兵士には、交互撃ち方を繰り返すのはそのための戦術だと説明しており、概ね納得しているようだが、それが欺瞞に過ぎないことは、艦長の王が最も理解していた。

もうひとつ、『施琅』には決定的な弱点があった。防御力の不足

だ。四〇〇ミリ砲搭載艦の『施琅』は、当然ながら施され防御は、対四〇〇ミリ砲のそれだ。戦艦は通常、決戦距離　すなわち二万メートルの距離で撃ち出された、自艦の主砲に耐えられるというところが、防御力の目安となる。

しかし『施琅』はその条件を満たしていない。

そして、一度の被弾で、早くもその弱点が露呈しかけていた。

五発の命中弾を受けた『施琅』は、打撃を受けた右舷側の副砲塔のほとんどを失った。また、炸裂の衝撃は第三主砲塔の旋回装置を歪めてしまい、第三主砲塔は旋回不能に陥ってしまった。

だが、まだ終わっていない。主砲は再び四発の砲弾を放ち、『ながと』に二発の命中弾を与えたのだ。その結果、『ながと』は火災を発生させた。

三、四発目の命中弾は、ついに『ながと』に大きな被害を与えた。まず、三発目が艦中央部に火災を発生させた。それも、VLSのすぐ近くだ。12式艦対艦誘導弾は撃ち尽くしていたが、アスロックは残っている。これは対潜魚雷だが、複数が一度に誘爆すれば大きな被害を覚悟しなくてはならない。

四発目が飛び込んだのは、回転翼機格納庫だった。そこにしまわれていたSH-60K哨戒ヘリは、一瞬でスクラップになってしまった。

また、弾着と炸裂の衝撃は大きく、バルジが緩み、機械室に漏水が発生してしまったのが、心配だった。本格的な浸水ではないが、放置すれば思わぬ悪影響を及ぼす可能性も、捨てきれない。

「ダメコンは火災を消し止める！　無理ならVLSに注水しても構わん！」

有阪の命令直後、さらなる直撃弾が、『ながと』を襲った。

第一章 尖閣諸島海戦4（後書き）

いよいよ日中両戦艦に、被害が生じました。

戸田海将補は、ちゃっかり『ながら』たちに攻撃手段まで指定してましたね。

彼は基本的に、「秩序無用、なんでもあり」な人物なので、それが当たり前なのですが。

なんでこんなのが海将補なのか、有阪一佐の疑問ももっともですね。

『施琅』の装甲についてですが、日本も昔行ったように、ある程度なら後から装甲を強化することは、可能でした。

あくまで“ある程度”ですが。

ただ装甲の強化は費用が嵩み、また就役が遅れるため、行われませんでした。

ただ装甲を強化すれば、四六〇ミリ砲搭載で低下した速力が、さらに遅くなってしまうので、同時に機関も交換する必要が生じるからです。

後々登場予定の中国国産戦艦では実は……。

相変わらずネタバレが怖いので、これ以上は言えません。

それでは、ご意見ご感想お待ちしております。

第一章 尖閣諸島海戦5

三度目の攻撃が『ながと』を穿った。すでに火災を生じており、自称駆逐艦は手酷い損害を受けているようにも見える。そこにさらに三発が命中したのだ。

艦の前部で、盛大な爆発が起こった。その火柱の正体は、王にもすぐに分かった。

「敵戦艦第二主砲塔を破壊しました！」

報告にCIC内で歓声が上がった。『施琅』は第三主砲塔が旋回不能だが、『ながと』の第二主砲塔を破壊したことで、使用できる砲門数は再びイーブンになった。

「よし、いいぞ！ このまま攻め立てろ！」

王は叫んだ。

それに答えるように、三門が砲弾を放つ。手数で敵を圧倒するという強度不足への対策は、功を奏しつつあった。

だがそこに、六発の敵弾が着弾した。命中弾は四発。大きな衝撃。CIC全体、否、艦橋が根底から揺さぶられたような、巨大な衝撃だった。嫌な予感だ。

「後艦橋連絡途絶！」

「艦首に火災！」

まず、二発が集中した後艦橋が、跡形もなく吹き飛んだ。さらに後部橋楼が倒壊し、左舷側副砲塔一基を押しつぶした。

一発は艦首に命中し、火災を生じさせた。もとより主要防御区画から外れた場所だ。防御など望んではいけない。辛うじて生きているカメラは、大きく挟まれた甲板とそこから吹き出す黒煙を映している。

あとの一発は……。

「航海艦橋全滅！」

あの衝撃の正体はそれだ。航海艦橋を失っては、真面な操艦がで

きなくなってしまう。

そして、悲報はそれだけに止まらなかった。

「『榆林』撃沈されました！」

『ながと』は危機的状況に瀕していた。第二主砲塔が吹き飛び、砲力の四分の一を喪失してしまったのだ。だが、それはまだ許容範囲内だ。先程から『施琅』の第三主砲塔が沈黙していることから、相手も主砲に不具合を生じていることは読み取れた。八対八が、六対六になっただけの話だ。

大きな問題は艦の表面にあるのではない。内部だ。敵弾の一発が、水中弾効果で舷側に命中し破口が生じたため、先に報告された機械室への漏水が、浸水となってしまったのだ。

現在、『ながと』が出し得る速力二五ノット。当初、速力で勝る『ながと』は『施琅』の頭を抑える形で、丁字戦法を仕掛ける算段だったが、それは不可能になってしまった。

これが四六センチ砲の威力か。

有阪は『施琅』の主砲の威力に、愕然とせざるを得なかったが、しかし事態は切迫している。

「浸水の拡大はなんとしても阻止しろ！ 第二主砲塔弾火薬庫、注水しろ！ 注水装置が故障！？ ポンプで機械室の水を送れないのか！？」

次々に指示を飛ばした。

そのそばで、戸田は報告を待っていた。そしてそれは、すぐにやってくる。

「『ながら』より報告です！ 『江衛？』級を撃沈しました！」

『ながら』以下の八隻は、唯一生き残っていた『江衛？』級のフリゲート『榆林』を沈めた後、戸田の命令で『施琅』を攻撃した。一度間合いを取って放った12式艦対艦誘導弾は八隻で一六発。それらは『施琅』の喫水線下を痛撃した。

海上自衛隊の駆逐艦八隻は、次々に誘導弾を放つ。すでに、先程の攻撃で『ながと』は青息吐息だ。苦境に立たされた旗艦を救おうというのだろう。

「副砲！ 対処せよ！」

通称“蠅叩き”と呼ばれる戦法が、実行さるた。まだ無事な一三〇ミリ砲が、誘導弾の進路上に水柱を幾重にも立てる。機関砲は誘導弾を直接狙う。幸い、敵誘導弾は左舷側から放たれており、そちらの副砲、機関砲は大半が健在だ。

だが、誘導弾は多く、努力は実らなかった。一二発を防げなかったのだ。誘導弾は喫水線付近に、相次いで命中した。

「被害知らせ！」

「右舷艦首被弾！ 浸水発生！」

「中部バルジ損壊！ 電路寸断されました！」

「艦尾に大規模な浸水！」

次々に悲報が舞い込む。

「機械室に浸水発生！」

「第四主砲塔、弾火薬庫付近に大火災！ 誘爆の危険あり！」

『施琅』は右舷側へ傾斜し始めた。まだほんのわずかだが、放置しておけば、傾斜が強まり揚弾機が使えなくなる。つまり、戦闘不能に陥る。

「前方に艦影多数！ 大型艦一隻含む！」

報告に王はモニターを見る。ほとんどのカメラは激戦で沈黙してしまったが、わずかに生き残っていたカメラは、戦艦一隻を含む艦隊を映していた。

「まさか小日本の増援か！？」

日本は『ながと』の他に巡洋戦艦二隻を持っている。そして事実、そのうち『いせ』を含む第三護衛隊群は現在、佐世保を出て尖閣諸島に急行していた。

趙は向かってくる戦艦の正体を、その艦型から見破った。巨大な四連装砲塔が三基、前方に集中し、後部はフラットになっている。

あれほど特徴のある戦艦を持つ国は、世界で一つしかない。

「いや、あれは小日本の巡洋戦艦ではない。美国の原子力戦艦だ。台湾に向かったと聞いていたが……」

第一章 尖閣諸島海戦5（後書き）

さて、第一章も終盤に入りました。

第一章は次で終了の予定です。

最後に登場したアメリカ軍の原子力戦艦の目的はいったい何なのか！？

正直、あまり期待しないで下さい。

期待外れだったりすると困るので……。

第一章 尖閣諸島海戦6

米海軍第七艦隊は、台湾周辺に向かっていた。中国は台湾を自国の経済圏に取り込むべく動いており、一方で、台湾への軍事圧力も強めていた。それを阻止するために、アメリカは第七艦隊を差し向けたのだった。

だが先島諸島の北を航行中、『ながと』から発信された通信を傍受し、さらに人民解放海軍との武力衝突に及んだことを受け、急遽、尖閣諸島に向かったのだ。

『ジョージ・W・ブッシュ』は、一二門の五〇口径四八三ミリ砲を振りかざしつつ、『ながと』『施琅』の間に割り込んだ。

「どうやら、相打ちかな」

『ジョージ・W・ブッシュ』艦長イーノック・B・エリオット大佐は、そう判断した。

CICから見える日中の戦艦は、盛大に黒煙を吐き、艦上はスクラップの山となっている。『施琅』は後艦橋を失い傾斜しているし、『ながと』は第二主砲塔を失い、後艦橋と第三主砲塔の間にあるヘリ甲板は、滅茶苦茶に破壊しつくされている。

射撃を止めた『施琅』は『ジョージ・W・ブッシュ』とすれ違い、やがて北西に向かう。上海か寧波にでも逃げ込むつもりだろう。損傷した三隻の駆逐艦はすでに水平線の彼方だ。

第一護衛隊群は、援軍として駆けつけた第三護衛隊群とともに、翌日深夜、佐世保に入港した。損傷した『ながと』は速力も出ず、また大破した姿を一般人に見せるねは憚られる。

第一護衛隊群九隻の乗員は全員が拘禁され、上陸できなかった。そして四月一三日、戸田に言い渡されたのは、二階級降格の上、除隊処分だった。彼は命令を受けた時、わずかに自嘲気味に笑うと、

従容と『ながと』を後にした。その笑いの正体は、余人には分からなかった。

東京も北京もワシントンD・Cも、戦いが始まってすぐに動いていたのだ。交戦開始から一時間ほどで、中国は日本政府に交渉を打診していた。舌を巻くほどの迅速さだった。しかも、その交渉で中国側が提示した条件は緩いもので、

- 一、尖閣諸島の周囲四二海里を非武装地帯とする
- 二、尖閣諸島周辺の開発及び漁船等の操業を停止する
- 三、双方の責任者はそれぞれの国内で処分する

この三つだった。経験則から理不尽な要求や苛斂誅求を予想していた益平は、思いの外緩い内容に、むしろ拍子抜けした。

すでに一枚咬んでいるワシントンD・Cも、この提案を飲むように、益平に要求した。

益平としても戦火の拡大は望んでいない。外務省に指示を出し、二つ返事で受け入れた。

しかし事態の収束に関係者の多くが安堵する中、益平は暗い表情だった。これまで無茶な主張を続けていた中南海がこの条件を提示したのは、まず間違いなく裏がある。まだ一波乱ありそうだった。

益平の考えは間違っており、中南海は対日開戦は時期尚早と判断したのだ。まだ戦艦は一隻。原潜は数を揃えたが、自衛隊の対潜能力は侮り難い。水上戦力も心もとなく、せめてもう一隻、建造中の戦艦が就役するまで時間を稼いだかった。

趙を予備役としたのも、日本側責任者の処分と釣り合いを取るという以外に、日本戦艦との戦闘経験を持つ指揮官を失いたくなかったからだ。双方の国内で処分というのは、そういうことなのだ。日本も指揮官を予備役としたのは、同じ思惑と思われる。

そして、時間稼ぎをするということは、いずれ日本と雌雄を決するつもりということだ。今は譲ればいい。アジアの、そして世界の覇者となるにはまだ、少しばかりの時間が必要なのだ。

時間稼ぎを必要としたのは、何も中国ばかりではなかった。アメリカもまた、中国と鉾を交えるのに時間を必要とした。

すでに日本を守るために、中国と一戦交える覚悟はしている。アメリカには世界戦略上、日本が必要なのだ。だからこそ基地問題で振り回されても我慢したし、日本が中国に接近しようとした時、必死で引き留めたのだ。経済的にも、いまさら日本と縁を切れるような状態ではない。

せっかく戦火の拡大は防がれたというのに、極東はきな臭いままだった。

第一章 尖閣諸島海戦6（後書き）

これにて第一章は終了です。

早くも停戦しましたが、日中の本格的な戦いは第二章からとなります。

一区切りついたということで、しばらくはもう一本の連載中の作品に専念したいと思いますので、第二章は少々遅れることが予想されますが、なにとぞご了承ください。

なお、ご意見、ご感想、ご質問は受け付けますので、ご遠慮なくお寄せ下さい。

第二章 日中開戦1

二〇二〇年五月一日、尖閣諸島に中国の二隻の戦艦が姿を現した。ロシアから輸入した『施琅』と国産の同型艦『定遠』だ。さらに駆逐艦、フリゲートなど八隻が続いている。

その先には、海上自衛隊の護衛艦『おおい』『なとり』が待っている。

「ほう、中国はあれを出してきたのか。見せつけてくれるな」

双眼鏡を覗きながら、平沼 辰実一等海佐は言った。

『おおい』『なとり』はこれから『施琅』『定遠』と尖閣諸島周辺の哨戒活動をするのだ。

領有権を巡り対立していた両国が、共同で哨戒活動をするのには、もちろんわけがある。四年ほど前、この周辺で領有権を巡り日中が衝突する、“事故”があった。その後の交渉で一時は非武装地帯化も試みられたが、それは失敗した。

台湾が動いたのだ。かねてより尖閣諸島の領有権を主張していた台湾は、日中の非武装地帯化に際し、「この決定について、日中両国が尖閣諸島の領有権を放棄したものと見做す」と宣言したのだ。直ちに非武装地帯化は白紙に戻され、結果、一度は領有権を巡り干戈を交えた島々を、日中の共同で警備するという椿事が発生した。宿敵と手を組むのは不本意だが、意地だけで台湾に資源を譲るのは、許せない。台湾の不戦勝を阻止するという点では、日中両国は一致した。

一部のおめでたい連中は「日中友好の証し」などと言っているが、事態はそれほど単純ではない。

『おおい』『なとり』はともに、五〇〇〇トン型護衛艦である。予算の制約からステルス化が中途半端になってしまったが、水上打撃力は従来の護衛艦の一・五倍と言われている。普段は四つの護衛

隊群に分散配置されているが、今回の哨戒活動には姉妹艦が舳先を揃えて参加していた。

平沼が双眼鏡を降ろしたその時だった。

「ソーナーに感！」

ソーナー員が叫んだ。

「艦型は！？」

平沼の問いに、すぐに音紋照合の結果が知らされる。

「商級の模様！ 二隻います！」

つい、平沼は唸ってしまった。商級は五隻が二〇〇六年から続々と就役している、原子力潜水艦である。

「原潜まで出すとは、こいつはちよつと異常だぞ」

航海長が叫んだ。

「艦長、あれは！？」

航海長が指差す先を見ると、一隻の船が人民解放海軍の単縦陣に続いている。一見すると客船のようにも見えるが、単装砲や機関砲も見受けられる。あれは、玉昭級ドック型揚陸艦『金甌山』だ。

「何をやらかすつもりだ？」

平沼の問いに対する答えは、海中から返ってきた。

「商級が魚雷発射管に注水しています！」

「まずい！ 回避運動だ！ 奴ら戦争を始める気だぞ！」

平沼が叫ぶが、ほぼ同時に二隻の商級が魚雷を放った。

「商級魚雷を発射、一二発です！」

「あ、『施琅』『定遠』発砲！」

海面に向いていた視線が、再び人民解放海軍艦隊を向く。赤黒い発砲炎が、しばんでいく。

「取舵！」

とつさに平沼は叫んだ。この際、取舵だろうと面舵だろうと構わない。とにかく狙いを逸らすことだ。

だが、魚雷は二隻を追いかける。砲弾が周囲に着弾する。やがて、破滅が訪れた。

『施琅』『定遠』は、二隻の護衛艦が沈んだ地点を通過した。結局、サポートのはずの商級が放った魚雷が、『おい』『なとり』を屠ってしまい、『施琅』と『定遠』は大した活躍はなかった。

脱出した自衛官が波間に漂い、捕虜として救助されていく。

その作業を『施琅』の艦橋から眺めるのは、趙 壮乾少将だ。一度は予備役に回されたが、今回の対日開戦にあたり現役に復帰し、その上戦艦部隊を任されたのだ。共産中国では普通、一度失脚した者が復権するのは不可能に近い。趙の場合は例外中の例外だ。

「『金命山』、揚陸作業を開始しました」

『金命山』から発進した四隻のLCMAが車輛や兵員を搭載し、尖閣諸島の主要な島に上陸していく様子は、『施琅』からでもよく見えた。

これでいい。数日は時間を稼げよう。そうなれば、領有の既成事実化も容易だ。また、慣熟訓練を終えた『鎮遠』も、すでに出撃している。尖閣諸島とその地下資源は、数日で確保できるだろう。

第二章 日中開戦1（後書き）

お久しぶりです。

最近、尖閣諸島を巡り加熱してきたので更新再開しましたが、ここへきて釈放とは何を考えているのか……。

第二章 日中開戦2

『おい』『なとり』が沈み、尖閣諸島が占領されたことに、日本は衝撃を受けた。

現在、益平は二期目だった。近年まれに見る長命内閣だ。尖閣諸島での“事故”を丸く収めてから、下がり調子だった支持率が持ち直したのだ。益平はただ中国の提案を飲んだだけだったが、元々、外交畑だったこともあり、その手腕が発揮されたという印象を国民が持ったらしい。

だが、今回は外交での解決は難しいだろう。恐らく、日本と対決するつもりだ。宣戦布告はないが、自衛戦争に宣戦布告は不要。自衛戦争か否かの判断も当事国の自己解釈権によるのだから、開戦に宣戦布告は全く不要と言っているようなものだ。そもそも過去の例を見ても、事前の宣戦布告が存在しない戦争は格別珍しいわけではない。慣例としても、宣戦布告を不要としていると考えた方が無難だ。すでに日中は事実上の戦争状態にあると見なした方が無難だろう。現状での対話は限りなく不可能に近い。

益平は直ちに安全保障会議を招集した。

「すでに聞いているとは思うが、中国が我が護衛艦を二隻撃沈し、尖閣諸島の各島に上陸した。統幕長、状況説明を」

石川 治雄統合幕僚長が返事をして状況を説明する。

「人民解放海軍は『施琅』『定遠』の戦艦二隻を基幹とする水上打撃群を、尖閣諸島周辺に展開しており、また、サポートに商級原子力潜水艦を少なくとも二隻、周辺に遊弋させています。尖閣諸島に上陸した陸上兵力は全体で一個旅団戦闘団規模と見られます」

「中国の大使館はどう言っている？」

益平の質問に、今度は柳谷 泰一外務相が答える。

「『現状での対話はありません』とのことです……」

「そ、それではどうしろというのですか!？」

住田 正富経済産業相が狼狽し、悲鳴のような声をあげる。もと住田は連立先の左翼政党の人間であり、平和主義者、悪く言えば、理想論を振りかざすだけで、実務能力は期待できない人物だ。数合わせのために入閣させただけで、益平に言わせれば戦力外である。

浮き足立つ住田を、益平がたしなめる。

「狼狽えるな。現状では交渉に乗らないということは、裏を返せば状況次第では外交交渉に移るということだ」

そして一拍置き、益平自身の意見を言う。

「私は、外交畑を歩んできたが、交渉に重要なのは誠意でも譲歩でもなく、相手が要求を飲まざるを得ない状況を作ることにあると思う。武力というのも、その手段のひとつではないかな」

再び住田が声をあげた。

「中国と戦争をするというのはですか！？ 正気ですか！？」

「私だって戦争をしたいわけではない。だが外交には相手がいる。必ずしもこちらの思い通りにはならないのだ」

住田は黙り込んだ。

それを確認した益平は、話を進める。

「アメリカが本格的な戦争として介入してくるか、局地的な紛争として介入を見送るか、それは分からないが、現時点では我が国だけでも解決できるように、策を練るべきだ。常任理事国が相手では国連の支援も期待できないだろう。独力で解決する必要がある」

藤野 昌郎防衛相が、自衛隊の動きを述べる。

「すでに補給艦『しかりべつ』『いなわしろ』はいつでも出動可能です。また、護衛隊群もすでに非常呼集をかけており、命令さえあればいつでも出動可能。陸上自衛隊の地対艦ミサイル連隊も、臨戦態勢を整えています」

「よし、直ちに防衛出動を閣議決定する。中国と一戦交えるぞ！」

安全保障会議の終了後、益平はアメリカのジャレッド・N・オル

ニー大統領と電話会談を行った。

「お久しぶりです、オルニー大統領。いきなりで申し訳ありませんが、我が国は先ほど、中国海軍から攻撃を受けました」

「お久しぶりです、益平首相、その話ならたった今、私の所にも届きましたよ」

「そうですね。では、回りくどい話はなしに、単刀直入に聞きますが、アメリカは条約に基づき我が国を支援して下さいますか？」

益平にはその点、心配だった。日本国内では、「中国はアメリカ国債を大量保有しているので、日中の戦いに米軍は介入できないだろう」という論調があるのだ。

だが、益平の心配は杞憂に終わった。

「もちろんです、我が国は正義の名において、パートナーを見捨てたりしない」

オルニー大統領の言葉は心強い限りだったが、「パートナーを見捨てたりしない」というのは、一〇年前、アフガンで苦戦する米軍を尻目に、給油活動を打ち切った日本に対する皮肉にも思えた。

だが、それはともかくオルニー大統領が示した戦力は、目を見張る物だった。

「すでに『ヴァージニア』級原潜の『ミズーリ』と『ノース・ダコタ』を差し向けました。『ジョージ・W・ブッシュ』も準備なり次第、沖縄に向かわせる予定です。我が国が介入すれば、中国もさすがに手を引くでしょう。それまで頑張つて下さい」

テロリストやゲリラには苦戦している米軍だが、正規軍が相手なら話は別だ。正規戦闘なら、米軍は今なお世界最強だろう。それが、原子力潜水艦二隻、原子力戦艦一隻を寄越してくれるなら、心強い限りだった。

第二章 日中開戦2（後書き）

ようやく更新再開と思ったら、再び一時ストップしてしまいました。申し訳ございません。

これはエンストのような物です。

次はなるべく早く更新しますので、ご容赦下さい。

さて、多数の戦艦と原潜を擁し、ついに尖閣諸島への本格的侵攻を開始した中国軍。

それに対し、果たして日本自衛隊はいかに立ち向かうのか。

それでは、ご意見ご感想等お待ちしております。

第二章 日中開戦3

米軍が援軍にきてくれるというのは、中国の圧倒的な軍事力と対峙する日本の国民、そして自衛隊や政府関係者の不安を一気に拭いた。

米軍の到着まで持ちこたえれば……！

この数日間面白いのは、益平内閣の支持率だった。六割台前半を維持していた支持率は、即日発表が売りのインターネットの世論調査によると、開戦によって一挙に三割台まで低下してしまった。

しかしアメリカの助力を得られると分かると、支持率が再び五割まで回復した。

無責任な評論家たちが、アメリカの支援を引き出したことに、「益平総理の外交手腕が発揮された」という論調を流したのだ。

お陰で益平の株が上がり、やがて、稀代の外交家として名を残すのだが、それはまた別の話である。

無論、アメリカが早々に介入の姿勢を見せたのは、わけがある。日本でいわれていた通り、中国はアメリカの国債を大量に保有している。だからアメリカは参戦できないというのが、日本国内の論調だった。

だが、たとえば中国が国債を市場に放出してドル安になろうと、アメリカには問題がないばかりか、しめたものだ。リーマン・ショック以来、アメリカの経済立て直しの基調は、ドル安による外需拡大、輸出拡大だから、むしろドル安になってほしいほどののだ。

それに、ドル安となれば相対的に元高となる。中国の経済を支えていたのは、元安による輸出好調が大きいから、アメリカ国債の市場放出は、自分の首を絞めることになりかねない。

これまで人民元の為替相場はドルに連動していた。共産党政府が意図的にインフレを作り出し、常にドルに対し元安となるように操

作していたのだ。

もしこれが続けるなら、ドル安に対抗すべく大量の人民元を刷つて、自国の通貨まで暴落させなくてはならず、信用を失い、共倒れしかない。

共倒れでは意味がない。

アメリカ国債の保有高は、問題ではないのだ。

国債の買い手がなくなるといふ懸念も、ドル安で輸出が伸びれば景気が良くなり税収が増えるので、そもそも大量の国債を発行する必要がなくなる。

むしろ、資産凍結の一環で利子の支払いや返済を差し止め、国債を踏み倒せるという暴論まで、アメリカ国内には存在している。

また、経済的要因だけではない。

一つに、同盟国を守り、軍拡を続ける中国を討つことで、中東で失った自国の国際的信用と、アメリカ軍の権威を回復させることができる。つまり、パクス・アメリカナの再興だ。

また、過去の日本とのやりとりが、対日支援を即決させた。一〇数年前、普天間基地移設問題があった。市街地に囲まれたこの巡航ミサイル基地は、かつてトマホーク・ミサイルの暴発事故を起こし、危険性を指摘されていた。移設は決まったが受け入れ先の選定は難航し、結局まとまらなかったのは、益平が首相となった二〇一四年になってからだった。

アメリカは沖縄県外への移設に難色を示していたが、益平は、アメリカ側に大幅に譲歩させることに成功していた。

というのも、益平はウルトラCとも言える、日中同盟の可能性を仄めかしたのだ。

その三カ月ほど前、政党の一つが議員団を中国に派遣していた。弱小政党だったが益平の党の連立先だったのが、日中同盟の可能性に現実味を帯びさせていた。

米中がいずれ太平洋の覇権を争うのは、素人でも分かる。その場

合、日本が米中のどちらに付くかが、大きなポイントだった。アメリカ側は日本をつなぎ止めるためにも、譲歩せざるを得なかった。

実は、議員団派遣は連立先の独断で、益平の意志とは関係なかった。ただ、アメリカとの駆け引きに利用させてもらったただけだが、これが成功したのだ。

そして今、その日中同盟を仄めかした益平が首相の日本が、中国から攻撃を受けている。もしここで日本を見捨てて中国側に寝返られたりしたら、アメリカにとって脅威となる。

中国と各個に戦うより、早いうちに連携して共同で戦う方が、アメリカにも利が大きい。

陸上自衛隊地对空ミサイル部隊の、新田原駐屯地に統合された巡航ミサイル部隊のトマホーク・ミサイルなら、尖閣諸島まで届く。グアムぬは戦略弾道弾もある。中国も自国が攻撃を受ける可能性を考えれば、おそらく日本本土を攻撃しようとは思うまい。

戦いは南西諸島、尖閣諸島周辺の限定戦争になるはずだ。原潜『ミズーリ』『ノース・ダコタ』原戦『ジョージ・W・ブッシュ』と合わせれば、中国も早期講和に応じるだろう。

第二章 日中開戦3（後書き）

作中の、中国がアメリカ国債を放出しても構わないというのは、実際にアメリカ国内にある論調です。

なぜか日本のメディアは伝えないのですが。

ところで、作中のアメリカ政府は益平総理は中国寄りと考えていますが、実際のところ、親中反米政権は“なぜか”短命なんですよ。飛行機が未発達なのに陸上自衛隊に地对空ミサイル部隊がいるのは、弾道弾や巡航ミサイルからの防衛や、固定翼機を差し置いて発達したヘリを迎撃するためです。

第二章 日中開戦4

結局、有事宣言が発令されたのは、五月三日だった。国会で議論が紛糾してしまったためだ。

当初事後承諾を考えていたが、安全保障会議直後、住田が情報をリークしてしまったので、国会での事前承諾が必要となってしまった。住田を解任し、その所属政党が連立を離脱するという一幕まであったが、結局、その他の政党が益平に同調したため、この左翼政党の対中戦阻止は失敗した。

だが陸上自衛隊は有事宣言が発令されるや、各地に地对艦ミサイル連隊を展開させ、同時に弾道弾による攻撃に備え、国内の要所所に高射特科のパトリオット・ミサイルを展開した。

一方、海上自衛隊も四個護衛隊群を出動させ、尖閣諸島に向かわせた。

そして、呉からも一個艦隊が出動した。第二護衛隊群とは別の艦隊である。

名を第一補給隊と言う。

その艦隊の中心にある艦は、巨大なクレーンを備えた補給艦に見える。艦尾には、艦名が記されていた。『しかりべつ』『いなわしろ』と。

『しかりべつ』『いなわしろ』は同型艦である。武器庫艦として建造された、真正正銘の戦闘艦だ。

しかし、表向き、補給艦とされている。カバーストリーでは、RIMPACへの参加や海外への災害派遣、復興支援から海賊退治まで、海上自衛隊の海外への派遣が増えるにつれ、洋上補給能力拡充の必要が生じ、二隻が建造されたという設定になっている。

実際には尖閣諸島での“事故”から四年、自衛隊は来るべき対中戦に備え、武器庫艦を建造していたのだ。

DDHを建造すべきという意見もあったが、表立った軍拡は国内世論が反発する可能性がある。そこで国際協力の円滑化を図るために補給艦を建造するという名目で、二隻を建造した。

あえて武器庫艦とした理由は、国内世論の反発を防ぐためだけではない。あの“事故”で、『施琅』が12式艦対艦誘導弾により、大きな被害を被ったことを受け、誘導弾の主力化が図られたのだ。

武器庫艦は必要な人員の数が少ないのも、魅力的だった。『ながと』『ひゅうが』『いせ』と、すでに三隻のDDHを保有する海上自衛隊には、これ以上DDHを建造しても、乗員を確保する余裕はないのだ。

『しかりべつ』型武器庫艦を扱う人員は、一隻につき四二名。二隻で八四名だ。この程度なら、なんとか捻出できる。そしてそれを扱う指揮官も、確保していた。

戸田 浩三予備二等海佐は現役復帰し、同時に海将補へ昇進、二隻の武器庫艦と護衛の指揮を任された。

この艦隊の旗艦は『あしがら』である。二〇三ミリ砲を搭載した巡洋艦クラスの護衛艦だ。もちろん、自称駆逐艦である。

就役から一二年経つが、第一線級の戦力を保持している。優れたレーダーと通信設備を備えた、武器庫艦のエスコートとして打ってつけの護衛艦だ。

本来、護衛隊群の所属艦だが、今回は変則的な編成で独立した艦隊の旗艦となった。

変則的な艦隊の指揮官に、変則的な手段で着任した戸田は、最初、艦隊編成を見て目をしばたかせた。海自に友人はいる。“補給艦としての”『しかりべつ』『いなわしろ』の存在は知っていた。だから、自衛隊が自分に何をさせたいのか、理解できなかった。

だが、二隻が武器庫艦であることを知り、俄然やる気が沸いてきた。なるほど、艦尾寄りに配置された艦橋構造物や、誘導弾再装填用の巨大なクレーンは、二隻に補給艦としての外観を与えている。

武器庫の名を冠する艦の秘匿名が補給艦というのも、言い得て妙な表現かもしれない。

その甲板上には三二モジュール、二五六セルものVLSが配置されているのだ。収納されているのは12式艦対艦誘導弾、90式艦対艦誘導弾各一二八発である。二隻で五一二発の誘導弾を運用可能だ。

かつて、アメリカ軍で武器庫艦の建造計画が持ち上がった時は、一隻五〇〇セル内外とされたから、少ないと言えは少ない。

だが、あらゆる面でコンパクト化されている海自には、これ十分だろう。正直な話、一隻に五〇〇セルもあっても、それを満たす誘導弾が確保できない。背伸びしない、身の丈に合った規模と言える。

艦体を小型化することで、もともと安かった建造費を、さらに安価にできたのも、大きな利点だ。

贅沢を言うなら巡航ミサイルも欲しかったが、残念ながら自衛隊は保有していない。かつては、導入の議論もあったが、政治的な配慮から実現できずに終わってしまった。

『あしがら』艦長飯原 智樹一等海佐は、戸田の強烈な個性に圧倒された。戦意……というより殺意の塊だった。

「合言葉は暴支膺懲だ」

「はあ……」

対面するなりそう言われ、自腹で作ったという幟まで渡された。もちろん、そこには『暴支膺懲』の四文字が記されている。

それなりの金額がかかったのだろうが、どう捻出したのだろうか。まず銭勘定を考える辺り、飯原は飯原で変わり者かもしれない。飯原はもともと経理・補給出身なので、職業病かもしれないが。

だがどんな人物だろうと、誘導弾主兵主義を標榜し、人民解放海軍の戦艦との実戦経験もあるのだから、適任といえは適任だ。

「俺の平穏な隠居生活を台無しにしてくれるとは、やってくれる。

恨み重なる中共を成敗してやる！」

第一補給隊は、戸田の狂気とともに呉を出動した。

第二章 日中開戦4（後書き）

5000トン型護衛艦の一番艦は『あきづき』だったか。

ということは、先代『あきづき』型や『秋月』型にあやかり、二番艦の名は『てるづき』でしょうか。

作中では5000トン 5500トンの連想で名前を付けましたが、どうでしょうかね。

高射特科にパトリオット・ミサイルがいるのは、航空自衛隊が存在しないという、トンデモ設定のためです。

飯原一等海佐が経理・補給出身なのは、もともと彼を『しかりべつ』艦長にしようとして、変更となった名残です。

第二章 日中開戦5

現在、人民解放海軍の通常型、原子力、合わせて少なくとも八隻の潜水艦が所在不明になっている。これらは南西諸島などに展開している可能性が高く、また、民間交通は戦場となることも考えられるため、全面的に規制されている。

当然、食料や生活物資の入荷は止まっているので、この地域では備蓄が頼りになるが、離島などはたちまち干上がってしまうだろうことが、予想される。

対策としては、結局、早期に講和しないしは停戦するしかないだろう。一度、海上自衛隊の潜水艦によるネズミ輸送も議論されたが、却下された。

それは早期講和ができない場合の、次善の策だ。そして早期講和を実現するためにも、潜水艦も戦力として投入するべきだ。

『キロ』級潜水艦の『370』は、海上自衛隊の潜水艦と遭遇していた。『そうりゅう』型潜水艦の『はくりゅう』だ。

馬 爽活大校にとって、沖縄に向かう日本艦隊を発見したのは、僥幸だった。危険を冒して大隅海峡まで肉薄した甲斐はあった。

残念なことは、戦艦が艦隊にいないことだ。大型艦といえば補給艦二隻を伴っているが、それもこの艦隊が、主力ではないことを示している。しかし敵は敵だ。攻撃しない手はない。

『キロ』級が静粛性に優れていることもあり、魚雷の射程内まで接近できた。

しかし魚雷を発射しようとしたところで、ついに発見されてしまった。

アスロツクを放たれ、『370』は慌ててさらに深い位置まで潜行した。

そこに待ち構えていたのが、『はくりゅう』だった。背後から放

たれた魚雷の二本が命中し、推進機を失い、浸水も発生した。潜行が沈没となった。

馬は自分の名を呪った。爽は喪に通じ、滅びる、失うという意味も持っている。今まさに活 即ち生命を失おうとしているのだ。

やはり、俺の名前は縁起が悪い。

生還を諦めた馬の耳に、船殻が圧壊する音が響いた。

同じ頃、人民解放海軍原子力戦艦『鎮遠』が姿を見せたのは、沖縄県中城湾だった。

『鎮遠』は八門の四六〇ミリ砲を、那覇市に向けた。

その任務は明 正興大校にとって、決して面白い任務ではない。むしろ不愉快といえた。『鎮遠』に課せられた任務とは、沖縄県民を人質とすることなのだ。

沖縄県民は日本国民の中でも、特に戦争アレルギーが強い。第二次世界大戦では地形が変わるほどの激しい艦砲射撃を受け、これにも強いアレルギーがある。おそらく、主砲を那覇市に向ければ、沖縄は反戦に傾き、日本政府を拘束してくれるはずだ。

「『鎮遠』が中城湾に入っただと!？」

『あしがら』の艦橋に、戸田の声が響いた。

「はい、陸自からの情報ですが、主砲を那覇市に向けているそうです」

「ええい、民間人に銃を向けるとは、どこまで卑劣なんだ! 所詮中国人だな! 時代が変わってもやることは変わらんか!！」

報告を聞いた戸田の怒気は、尋常ではない。有らん限りの罵詈雑言を並べ立て、人民解放軍、いや、中国人を罵った。

その様子は傍から見ても、少し異常だ。なぜそこまで中国人を嫌うのか、飯原には理解できない。試しに聞いてみた。

「司令は中国人が嫌いなようですが、もしよろしければ理由をお聞かせ下さい」

これに対し、戸田は一度ため息を吐き、理由を延べ始めた。

「一九三二年七月二九日だ。その日、俺の父方の祖父は、通州にいたそうだ」

この言に飯原にも、戸田の言わんとすることは分かった。一九三二年七月二九日とは、通州事件が起こった日だ。中国の冀州防共自治政府保安隊によって、通州で日本人及び朝鮮人二三人が虐殺された事件である。

「祖父はその日、仕事でたまたま立ち寄った通州で、中国の保安隊に殺された。祖母も、敗戦後に満州で中国人の強盗に殺された。父は一人で命からがら日本に逃れたそうだ。父はその時一五歳だったが、相当苦労したらしい」

飯原は思いつきで聞いてしまったことを、激しく後悔していた。艦橋内の空気も重くなっている。

「祖父も祖母も会ったことはない。だが父が木の根を齧り泥水を啜る生活を強いられたのは、中国人のせいだ。だから絶対に中国人に復讐すると決めたんだよ」

重い話に、艦橋の空気が沈み、土気が一気に沈滞した。

戸田は続けた。

「そういうことだ。諸君、俺は沖縄県民に父と同じ辛酸を嘗めて欲しくない。その子供たちが俺と同じように復讐に囚われるのも、阻止したい。そのためには、なんとしても人民解放軍から沖縄を護らなくてはならない。済まんが、手を貸してくれ」

戸田が言い切った時、飯原は艦橋にいる全員が不動の姿勢を取っていることに、気が付いた。沈滞した土気が払拭され、全員が、視線を戸田に注いでいる。

まずい、全員が司令に吞まれているぞ。

飯原は思ったが、しかし彼自身、格別強い意志があるわけではなく、周りの雰囲気になされやすい傾向があった。自らも自覚している短所によって、飯原は戸田に向け敬礼をした。

その敬礼を了解と受け取った戸田は、答礼する。その瞳に宿った

強い意志が目指すのは、沖縄防衛なのか、己の復讐の遂行なのか、飯原には判断できなかった。

第二章 日中開戦5（後書き）

戸田海将補の話は、無理矢理臭いと言うか……無茶な設定に思えます。

ですが、通州事件は実際にあった事件です。

“なぜか”教科書には載ってませんが。

なぜ載っていないのかは、今さら触れる必要も無いでしょう。

ちなみに私は根に持つタイプなので、通州事件のことは未だに恨んでいます。

とりあえず、第二章はこれで終了です。

第三章はいつになるか分かりませんが、気長にお待ち下されば幸いです。

第三章 誘導弾打撃戦1（前書き）

第三章『誘導弾打撃戦』の幕開けです。

だいぶ間が空いてしまったことをこの場でお詫びします。

何しろ、私自身がこの作品の存在をすっかり忘れていたので……。無責任にもほどがありますね、はい。

どうせ私はテキトーな無責任野郎ですよorz

まあ、何はともあれ、誘導弾主兵主義第三章をお楽しみ下さい。

第三章 誘導弾打撃戦 1

南西諸島の東方を進む艦隊は、だいぶ珍妙だった。旗艦『あしがら』のマストには自衛艦旗　いわゆる旭日旗と、国際信号旗の中で曳船の必要を告げるZ旗、そして『暴支膺懲』と書かれた幟が翻っている。

自衛艦旗は、艦隊の所属が日本国海上自衛隊であることを示し、Z旗が示すのは『皇国の興廃此の一戦にあり　各員一層奮励努力せよ』である。幟の文言は読んで字のごとく、暴虐な支那を断じて懲罰するという意味である。

艦隊は二隻の大型艦を中心に輪形陣を組んでいた。

中心にいる二隻は、艦首から中央部にかけてのフラットな甲板や艦尾寄りの艦橋構造物など、一見コンテナ船のようにも見えるが、れっきとした護衛艦である。

『いなわしろ』『しかりべつ』はその甲板の下に二五六発、二隻で五一二発の誘導弾を隠し持つ、強力な戦闘艦なのだ。

艦隊の旗艦『あしがら』は、『あたご』型護衛艦の二番艦だ。『あたご』型護衛艦は、かつての偵察巡洋艦に近い思想で建造された。主力艦隊の前衛として敵情視察を行うのだ。そのため、強力なレーダーと充実した通信設備を持っている。

艦尾は本来フラットで、索敵及び対潜哨戒のために、ヘリを運用できるようにになっている。

が、今の『あしがら』の後甲板はフラットではなく、長いヒレのような突起が存在した。そして、SH-60Kが格納されていた空間には、今はSH-60Kの姿はなく、奇妙な物体が置かれていた。『これって、使えるのですかね？』

「使って見なきゃ分からないけど、使えんとこの艦隊は無用の長物になりかねんぞ」

普段はヘリの整備を行っている隊員たちは、その物体を見ながら

話していた。

同時刻、南西諸島北方を三隻の大型艦を含む艦隊が、波濤を乗り越え前進していた。

『ながと』『ひゅうが』『いせ』、DDH三隻を主力とし、一六隻からなる大部隊だ。敵潜水艦に備え輪形陣を構築し、周囲にはS H - 60 J / K が飛び交っていた。

戦艦、自衛隊というDDHにとって最も脅威となる艦艇は、水面下に隠れ、魚雷によって喫水線下を破壊する潜水艦だ。

人民解放海軍は多数の潜水艦を戦線に投入し、すでに日中の潜水艦同士で、戦闘も惹起している。

この艦隊が目標に定めている『施琅』と、その同型艦『定遠』は、四六〇ミリ砲を搭載している。『ながと』はともかく、『ひゅうが』『いせ』は単艦では対抗が難しい。性能の差は数で補うしかないから、接敵前に消耗するリスクは、なるべく減らさなくてはならない。

『ながと』の、後艦橋と第三主砲塔の間にある飛行甲板からも、ひっそりなしにSH - 60 K が離着艦している。この配置はヘリのパイロットには、不評だ。航行中の艦の後艦橋と主砲塔の間の限られたスペースに降りるには、想像以上に高い技量が求められる。

もし次にDDHを建造する時は、『ニミッツ』級や『あたご』型のように主砲を艦首側に集中し、艦尾を全て飛行甲板にして欲しいと、要望も上がっていた。

またそのような主砲の集中配置は、防御面でも有利なので、艦隊側としても望むところだ。問題は新たなDDHが建造されないところである。

水上部隊が進撃する一方、この時訓練のために東シナ海に展開していた、海上自衛隊潜水艦『けんりゅう』『しんりゅう』は、直ちに尖閣諸島に向かった。

『けんりゅう』はともかく、『しんりゅう』は先月竣工したばかり

りで、慣熟訓練中である。

『はくりゆう』『こうりゆう』の合流を待つべきかとも思われたが、一刻も早く接敵し、主力部隊をサポートするべきと判断した。

『しんりゆう』艦長の黒岩 英吉一等海佐は、潜水艦一筋三〇年のベテラン“ドン亀乗り”である。『しんりゆう』には他にもベテランが多く配属されており、彼は自艦の能力と乗員の質なら、十分実戦に耐え得ると考えていた。

尖閣諸島に近づくにつれ、緊張し背筋に悪寒が走る。

「武者震いですか？」

副長の柄本 仁二等海佐が、話しかける。

「ああ、なにせ……」

初めての实戦だからな。そう言うまでもなく、柄本にも黒岩の心境は分かる。海自の潜水艦にとって、今回の紛争が初の実戦参加になる。潜水艦のスペックや乗員の質では、世界でもトップクラスだと言われているが、実戦では何が起こるか分からない。

「自分も、緊張しています」

柄本が言った時だった。

「ソーナーに感、商級とおぼしき潜水艦」

「急速潜航深度二〇〇、デコイ準備」

ソーナー員の小さな、しかしはっきりした声に、黒岩は即座に指示を出した。

第二次尖閣諸島海戦の幕開けだった。

第三章 誘導弾打撃戦2

商級は『しんりゅう』に気づいていないようだった。

黒岩は、ある意味悩んでしまう。自衛隊は専守防衛でしか戦えないので、相手がこちらに気づかないことには戦えない。

しかし、さりとて位置を暴露するのは、潜水艦としてどうなのだろうか。ピンを打てば気づくだろうが、位置を暴露することは、潜水艦にとって死に等しい行為だ。

「艦長、どうせ海底で何があっても、外には分かりません。やりましょう」

柄本が囁し立てる。

「しかし、いくらなんでもそれはまずい。着底してしばらく待機だ」
尖閣諸島周辺は、たしかに中国の主張通り、大陸棚の延長にあり、水深は浅い。もちろん、だからと言って尖閣諸島が中国領のわけはないのだが。「大陸棚の延長にあるから中国領」などという妄言が通るなら、「いずれ日本に飲み込まれるから、ハワイもマリアナも日本領」という屁理屈まで通りそうなものだ。もちろんあり得ない。

同じころ、首相官邸では、加山 信彦官房長官が記者会見を開いていた。

「一昨年の閣議決定と昨日の国会の承認を踏まえ、日本が中国に対し事実上の戦争状態に突入したこと。そして有事宣言が発令されたこと。さらに歴史的事実に基づき、尖閣諸島は日本国領土であり、この戦争は中国の侵略に対する自衛戦争であること。外国人記者もあり、これらの内容は、全世界に報じられた。」

加山は最後に、主に日本国民と自衛隊に向け付け加えた。

「国軍の代替組織たる自衛隊の専守防衛とは、すなわち国家としての専守防衛であります。すでに国家として第一撃を受けた以上、どのような状況であろうと実力行使の場では、日本国政府の名におい

て、先制攻撃を辞さない物であります」

つまり、専守防衛とはあくまで自ら戦端を開かないという意味であり、一度戦争状態に突入すれば、自ら進んで脅威の排除を行う。しかも「どのような状況であろう」とは、すなわち敵国内への逆進攻をも、選択肢に含めていることを意味する。

もちろん、自衛隊には他国への侵攻能力はないし、政府としてもそこまでする気はない。

しかし、不退転の決意を示し、圧力をかけることが重要なのだ。

魯迅は中国人の奴隷根性と称したが、中国人の考え方の基本は弱い者苛めだ。中国人相手に譲れば、好ましい結果は得られない。弱い者苛めということは、逆に強者には逆らわない。实力を見せつけ、徹底的に、強圧的に接することが、中国人を抑える秘訣なのだ。

益平はそのことを、経験則から十分に心得ていた。

有阪 洋史海将補は『ながと』艦橋にあつて、他の乗員とともにその記者会見の様子を、テレビ中継で見つめていた。

「実力行使の場では、日本国政府の名において、先制攻撃を辞さない物であります」

加山が宣言した瞬間だった。有阪は命令を飛ばした。

「よし、許可が下りた！ これより我が艦隊は敵艦隊に対し先制攻撃を仕掛ける！ 『心眼』を飛ばせっ！」

ただちに、『あたご』の後甲板に突き出した、ヒレのような突起に、『心眼』と呼ばれた兵器が設置された。

同じころ、南西諸島東方を進む第一補給隊、通称戸田艦隊では、やはり戸田が同じ命令を出していた。

「我が隊は中城湾を蹂躪する驕敵を撃滅する！ 醜艦を一隻残らず轟沈せよ！！ 『あしがら』に連絡、『心眼』を射出！！！」

その様子と台詞は、ファナスチック・エクストリミストという表現が、的確かも知れない。

『あしがら』の格納庫が開き、後甲板に、『心眼』と称される小型飛行機が設置される。これは小型の無人偵察機だ。第一補給隊の目となり、目標を捉えるのだ。

推進力には、ジェットエンジンを使用する。

これは不思議なことではない。固定翼機は一九五〇年代末から急速に発展を遂げ、ジェット機自体は存在するのだ。

これまで軍がジェット機に興味を示さなかったのは、確かにその投射力、輸送力は大きいが、しかしそれ以上にコストがかかるからである。調達費はもちろん、整備された長大な滑走路などの専用設備、膨大な燃料、専門技能を持つパイロットと整備人員の育成……。果たしてそれらの投資をして、費用対効果はあるのか。

結局、すでに大きな地位を占めていたヘリで十分という判断から、積極的に取り入れる話は現れなかった。

僅かな積極導入派も、守旧派に潰された。戦車が出現した直後も、列国陸軍で戦車は歩兵科か騎兵科かで揉めたが、ここでも派閥争いが、各国の陸海軍で発生したのだ。

第三章 誘導弾打撃戦2（後書き）

無人偵察機ですが、ジェット機が登場しました。

はい、ジェット機は存在します。

巡航ミサイルがあるのだから、当然、ジェットエンジンがあります。ちなみにこの作品はあくまで「誘導弾主兵主義」ですから、「航空主兵主義」にはなりません。

無人偵察機はあくまで補助兵器です。

第三章 誘導弾打撃戦3

『心眼』を打ち出す道具は、電磁カタパルトである。航空機用カタパルト自体は、真新しい技術だが、ようするにリニアモーターカの原理を、そのまま利用しているのだ。

航空機の発達が遅れた結果、鉄道は陸上輸送の分野で発達を続けた。二〇一〇年には日本でもリニアモーターカーの営業運転が、一部区間で始まっていた。

その技術を流用し、一瞬で『心眼』を離陸速度まで加速させるのだ。

甲高い音とともに、『心眼』は舞い上がった。自身の持つエンジンで、『あしがら』からの指示に従い、中城湾へと向かった。

『施琅』『定遠』他、駆逐艦六隻、フリゲート二隻で編成された人民解放海軍艦隊は、この数日、尖閣諸島の周辺を遊弋し、そして全世界に日本の首相官邸から発信された記者会見を受信していた。

日本語が分かる兵士と北京官語が分かるという自衛隊の捕虜が、内容を北京官語に訳し、趙 壮乾少将のもとに届けた。

その内容、特に最後の先制攻撃を容認する宣言に、趙は内心驚いた。

これは、実質的な宣戦布告だ。

日本は一〇年前から弱腰外交を繰り返していたのだ。今回の攻撃も、国民への被害を恐れれば、日本政府はこちらの要求に屈するという目算のもと、行われている。

であるから、すでに算段は崩れている。

それでも、趙は落ち着いていた。こちらには膨大な人質がいるのだ。沖縄県民だけではない。捕虜となった自衛官もいるし、中国本土で拘束された日本人もいる。

それらをちらつかせれば、日本は一〇年前の漁船衝突事件のよう

に、対応が尻すばみになることも、十分に有り得るではないか。

いざとなれば資産凍結や禁輸措置を含め、経済的な圧力をかければいい。

趙の認識では、日本政府はどこまでも腑抜けの集まりでしかなかった。

『施琅』のレーダーは『あたご』から発進した『心眼』の機影を捉えていた。

「レーダーに反応！ 航空機です。IFFに応答なし」

この報告を受け、副長の柳 到凱中校は聞き返した。

「日本軍のヘリか？」

「いえ、ヘリにしては速すぎます」

「では何だというんだ？」

柳中校が悩んでいる間にも、事態は進んでいく。

「低空よりミサイル！ 七〇以上！」

「しまった！ 日本軍の攻撃か！！」

柳中校が悟った時には遅かった。

「敵弾、低空よりなおも接近、三七発、さらに後方より三八発です！！」

「艦長に知らせろ！ 防空戦闘だ！」

柳中校が指示を出した時には、すでに艦橋からも海面を這うように進むSSMを確認することができた。

『施琅』『定遠』の副砲塔とCIWSが旋回する。随伴する駆逐

艦も同様に、主砲塔と機関砲を旋回させた。

「電子妨害始め」

「電子妨害始め！」

ECMが敵弾に対し、妨害を開始する。

しかし、SSMは惑わされることなく、突進を続ける。

「撃ち方始め！」

各艦の艦長は、射程内に入ると同時に命じた。

たちまち形成された濃密な弾幕が、七五発のSSMを包み込み、水柱がその行く手を遮った。

だが、一〇隻で防ぐには、数が多すぎた。

その大半を撃墜しながらも、ついに最初の命中弾が発生した。

「『泰州』被弾！」

趙は『泰州』の方向を見やる。

被弾による爆煙に包まれる『泰州』を捉えた瞬間、乗艦『施琅』の舷側に高々と水柱が立ちのぼり、激震が足元を襲った。

「被害知らせえ！」

「右舷中央に被弾一、浸水は認められず！ 航行に支障ありません！」

『施琅』艦長宇 義徇大校は叫んだ。

「くそ、なぜ妨害が効かんのだ！？」

趙は上空を見上げ、言った。

「あれだ、あの偵察機が誘導しているのだ」

「あの偵察機を撃ち落とせ！」

宇が叫び、無人偵察機を撃墜した時だった。

「第二波来ます！」

後続の三八発が飛び込んできた。

副砲もCIWSも射撃を停止することなく、第二波を迎撃する。

無煙火薬とはいえ、全く煙が出ないわけではない。対空射撃が可能な火器全ての連続射撃により、すでに艦上は硝煙に包まれている。それにより海面すれすれを飛ぶ敵弾は、艦橋からも目視できない。と、弾幕の上に二〇発の敵弾が飛び出す。CIWSから放たれる三〇ミリ砲弾が、その後を追った。

少なくとも一〇発以上が碎け散るのが、確認された。

「直上攻撃くるぞ！ 衝撃に備え！！」

『施琅』を二度目の直撃が襲った。

第三章 誘導弾打撃戦4

「敵戦艦『施琅』に命中一発、小破。他、『ソブレメンヌイ』級駆逐艦一隻及び『舟山』級フリゲート一隻を大破！」

『心眼』が撮影した映像から、第一波攻撃の戦果を分析した結果は、『ながと』に陣取る有阪に伝えられた。

残念ながら直後に『心眼』は撃墜されたため、続報はない。情報収集衛星はちょうど尖閣諸島上空から外れているため、衛星写真も手に入らない。自前の情報収集衛星の数が乏しいのは、日本の泣き所だ。アメリカ軍とのデータリンクはあるが、全ての情報をリアルタイムで共有できるわけではない。

「敵戦艦は一隻小破のみか……、敵も易々とやられはしないか。しかし厳しいことになったな」

海自の砲戦戦力主力のうち、『施琅』『定遠』と互角に渡り合えるのは、『ながと』のみ。『ひゅうが』『いせ』には荷が重いのではないだろうか。

本来なら、誘導弾による先制攻撃で、敵戦艦を丸裸にするか、中破以上の打撃を与えたかった。

このままでは、艦隊決戦で苦戦を強いられるだろう。

佐野 直喜幕僚長が、提案する。

「一度距離を取り、第一補給隊か『ジョージ・W・ブッシュ』と合流するのも手ですが？」

「だが、それでは時間がかかり過ぎる。沖縄周辺の安全確保が一日遅れれば、それだけ長く沖縄県民が苦しむことになる」

これが、艦隊司令部を悩ませる要因だった。

戦力の集中という点では、合流すべきだろう。

そもそも当初は、有阪艦隊と戸田艦隊は薩南諸島西方で合流する予定だったのだ。

しかし、戸田艦隊は急遽、中城湾の『鎮遠』を撃破するという任

務が与えられた。

沖縄県民を人質にする『鎮遠』は、奇襲により、一撃で戦闘能力を奪わなくてはならない。DDHには難しい任務だからこそ、一度は大隅海峡を西に抜けた戸田艦隊は、合流を断念して口永良部島沖で変針し、トカラ海峡を東に引き返してしまった。

『鎮遠』を撃破した戸田艦隊と、再び合流するとなれば、時間を浪費する。

その間に中国は尖閣諸島領有の既成事実化をますます推進するだろうし、沖縄県、特に先島諸島の安全確保が遅れることにもなる。

有阪と幕僚たちが悩んでいると、CICから警報が入った。

「艦橋、CIC！ 『あたご』より通報、敵弾とおぼしきミサイル二三発！ 向かってくる！！」

「なんだと！？」

有阪たちは、すっかり失念していた。ロシアにおいて、戦艦『アドミラル・クズネツォフ』もまた、政治的理由からDDH同様の装備を持っていたことを……。

人民解放海軍は、戦艦『ワリヤーグ』を購入すると同時に、ソ連製対艦誘導弾SS-N-19SSMをロシアから輸入していた。

もともと、ソ連が『アドミラル・クズネツォフ』に、ダーダネルス、ボスボラス両海峡を通過させるために装備させた物である。

モントルー条約でダーダネルス、ボスボラス両海峡は戦艦を通航を禁止されていたが、ソ連は重砲戦巡洋艦という艦種を作り出し、

『アドミラル・クズネツォフ』をその枠に収めた。

その際に『アドミラル・クズネツォフ』が巡洋艦であるという根拠が、VLSの存在だった。

普通、遠距離砲戦が基本の戦艦には、VLSは搭載しない。戦艦は第一次世界大戦のユトランド沖海戦以降、大落角の砲弾に対し、水平装甲の増強を行っていた。VLSはその水平装甲に穴をあけ、生身のミサイルを剥き出しにしているのに等しいのだ。

であるから、VLSは普通は砲戦距離の短い、巡洋艦以下の艦艇に搭載する。

この時『施琅』と『定遠』は一二セルずつ、二隻で合計二四発を発射していた。

途中、一発が故障により落伍したが、二三発は有阪艦隊への肉薄に成功した。

有阪艦隊でSS-N-19の洗練を受けたのは、護衛艦『あたご』だった。

もともと『あたご』型護衛艦は、かつての偵察巡洋艦に近い発想で建造された艦である。本隊より突出した位置にいたため、集中攻撃を受ける結果となってしまった。

時速六五〇〇キロで迫る誘導弾に、すぐにCIWSが旋回し仰角を取る。

『あたご』砲雷長の村杉 淳三等海佐は、CICで叫んだ。

「SM-2発射、サルボー！」

まず、VLSに納められたSM-2が火を噴いた。攻撃ヘリやミサイルの撃墜を目的とした、スタンダードミサイルだ。

だが、同時に二三発は一隻には、捕捉はともかく対処するには多すぎた。そもそもVLSに即応態勢のSM-2が少ない。サルボーと言っても、一二発だ。

SS-N-19は数を減らしながらも、一九発がなおも接近する。村杉はさらに叫ぶ。

「シースパロー、サルボー！」

RIM-7シースパロー艦対空ミサイルが一二発、さらに発射された。

CICのスクリーン上で一気に八発が消滅し、一一発まで激減した。

だが言い換えれば、まだ一一発も残っているのだ。

「CIWS射撃開始！」

これが最後の頼みだ。一発、二発、CIWSは着実に成果を上げる。

だが、間に合わない。

ついに、『あたご』は一六発のSS-N-19を撃墜しながらも、被弾した。

最初の一発が艦中央部に命中すると、負の連鎖が始まった。

防衛線の再構築は不可能だった。『あたご』は艦体随所に七発の命中弾を受け、力尽きた。

日中主力艦同士の激突の第一幕は、誘導弾の撃ち合いに始まったが、双方ともついに、主力艦に決定的な打撃を与えることはできなかった。

第三章 誘導弾打撃戦5

日中主力艦隊同士の交戦の直前、すでに戸田艦隊は中城湾の『鎮遠』と交戦していた。戸田艦隊の任務は、沖縄県民を人質とする『鎮遠』の無力化。つまり有阪艦隊の交戦開始より前に、『鎮遠』に対する先制攻撃を仕掛ける必要があった。

「どの程度の誘導弾を投入するか」

「多ければ多いほどいいが……」

誘導弾幕僚の森山 秀郎二等海佐と作戦幕僚の多田野 春紀二等海佐は、悩んでいた。

何しろ、誘導弾のみで戦艦を撃沈か、少なくとも戦力発揮不能にしようというのだ。必要とする投射量は参考データがない。

戸田は聞いた。

「第二補給隊の位置は？」

第二補給隊は戸田の率いる第一補給隊と違い、補給艦『ましゅう』以下の、本物の補給部隊である。

武器庫艦はVLSの誘導弾を撃ち尽くせば、無用の長物となってしまうので、補給部隊はなるべく側にいることになっている。

多田野が答える。

「我が隊の後方二五哩です」

『ましゅう』では全速でも合流に一時間以上かかる。

だが戸田は断を下す。

「よし、全弾撃つ」

「よろしいのですか？」

「我々は民間人から、ただの一人も犠牲者を出してはならないのだ。もし一撃で『鎮遠』の戦闘力を奪えなければ、どうなる？ 奴らは那覇に無差別艦砲射撃を行うだろう。我々は非難されるぞ、自衛隊の不用意な攻撃が艦砲射撃を誘発した、とな」

左翼政党やマスコミに対する配慮が必要なのは、どこの国でも共通だが、日本の場合は制約が極端に大きい。正直な話、マスコミは全て敵と考えた方が無難だ。

「何より、勝つためなら民間人を犠牲にしていいたいなどと言ってしまつたら、俺も中国人と同レベルだと認めることになる。それだけは許せん」

「分かりました、全弾撃ちましょう」

森山は戸田に従う。一撃で仕留め損なえば、第二撃が必要になる。ならば最初から全弾撃ち込んで、敵がリアクションを起こす前に確実に仕留めるべきだ。

「『心眼』が敵艦上空に到達しました」

『あしがら』で、頷きながら戸田は命じた。

「第一波発射」

二隻から12式艦対艦誘導弾及び90式艦対艦誘導弾各一二八発が、勢いよく発射される。『いなわしろ』『しかりべつ』の艦上が白い噴煙で埋め尽くされた。

それだけではない。輪形陣を形成する『あしがら』以下八隻から、一六発の90式艦対艦誘導弾が放たれる。

第一波の発射を終え五秒後、戸田はさらに躊躇なく命じた。

「第二波発射」

再び、12式艦対艦誘導弾一二八発、90式艦対艦誘導弾一四四発の計二七二発が向かう。

『鎮遠』は『心眼』を捕捉していた。

「日本の無人偵察機でしょうか？」

「敵とおぼしき誘導弾二七二発、後方にさらに同数を確認！」

「なんだと!？」

『鎮遠』艦長 正興大校は、とっさに防空戦闘を命じた。

いや、那覇に対して艦砲射撃を行うべきだったかもしれないが、

まず優先するのは生き残ることだ。

SAMが、副砲が、機関砲が、迫りくる誘導弾に火を噴いた。だが、数が多すぎる。対処しきれない。

この時、『鎮遠』を襲った火力投射量は、猛烈なものだった。

『鎮遠』以下の艦隊に向けられた誘導弾は五四四発。誘導弾による攻撃としては、史上最高密度の飽和攻撃だった。

五四四発はそのほとんどが『鎮遠』に集中した。

12式艦対艦誘導弾が『鎮遠』の舷側を突き破り、90式艦対艦誘導弾が、艦上構造物を吹き飛ばしていく。

この間、わずか数秒。『鎮遠』は主砲を一発も放たぬまま、沈黙した。

周囲の支援艦艇も戦力としての価値を残していない。

攻撃は右舷側に集中したため、『鎮遠』は大傾斜に陥った。12式艦対艦誘導弾は、主要防御区画こそ打ち破れなかったものの、その他の部分では大規模な浸水が発生していた。もはや、『鎮遠』には戦闘は不可能だった。

『鎮遠』はすさまじい飽和攻撃に艦橋、煙突、マスト……、あらゆる構造物を吹き飛ばされた。もはや艦型判別すら困難だろう。

分厚い装甲に守られた司令塔内のCICにいた明は無事だったが、連絡の途絶した区画は思いの外多く、火災や浸水に適切な対処ができなかい。傾斜が大きくなっていくのを、指をくわえて見ていることしかできない。

機械室にも大浸水が発生しており、もはや航行不能に陥るのも時間の問題だ。

二番主砲塔脇に設けられたVLSのうち、右舷側は誘爆を起こしており、艦体は大きく傾かれている。

主砲は砲身をことごとくねじ切られ、あるいはねじ曲げられ、射撃できない。仮に砲身が無事でも、すでに傾斜が揚弾機を使用不能にしている。

つまり、CICの把握している状況は、『鎮遠』は戦闘はおろか航海すらできないことを物語っていた。

明は薄暗いCICの中にあって、何もできなかった。

第三章 誘導弾打撃戦5（後書き）

『鎮遠』がなんかあつさりやられすぎかな。

まあ、沖縄県に被害が出るのは困るので、ご都合主義で対処したと
いうことですね。

これにて第三章『誘導弾打撃戦』は終了です。

申し訳ありませんが、第四章はまだ当分先になると思います。
気長にお待ち下さいとしか申せません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8259m/>

誘導弾主兵主義

2011年5月27日16時48分発行